

アルツハイマー病 におい検査で早期診断

鳥取大が新手法 正常ならかぎ分け可能 治療にも好影響

2010年8月24日 共同通信社

物忘れなどの症状が極めて少ない早期のアルツハイマー病を、においの検査で見分ける手法を鳥取大の研究グループが23日までに開発した。アルツハイマー病に根本的な治療法はないが、投薬や非薬物療法を早く始めることで、病気の進行を食い止める効果が高くなるとしている。

アルツハイマー病では、症状が目立たないごく早期から嗅覚（きゅうかく）異常が現れることが知られており、これを応用した検査の実用化が急がれている。

鳥取大グループは、日本人になじみのあるにおいを選ぶなどの工夫で、ごく早期での病気の判別を可能にしたという。

検査で用いているにおいの	材木	にんにく
	メントール	練乳
	墨汁	香水
	バラ	蒸れた靴下
	家庭用ガス	ヒノキ
	ミカン	カレー

鳥取大リサーチアシスタントの神保太樹（じんぼ・だいき）さん（生体制御学）や浦上克哉（うらかみ・かつや）同大教授（同）らのグループが採用したのはヒノキやメントールなど12種類。

認知症の簡易テストや診察で早期アルツハイマー病とされた平均約80歳の早期患者33人と年齢の近い非患者40人で、におい検査を実施。早期患者には脳の画像診断などから病気の有無を確認した。

12種類のうち5種類以下しかかぎ分けられなかった人を「異常あり」として判定。認知症簡易テストでは、30点満点中24点以上とテストでは病気と判定できない、ごく早期の患者でも85%で嗅覚異常が見つかった。

神保さんは「従来の検査では判定できないごく早期でも見分けられた。さらに精度を上げるほか、自費でも気軽に受けられるよう安価な検査として実用化を目指している」としている。

※アルツハイマー病

物忘れなどを中心とした認知症の原因の一つ。脳の細胞が脱落して、記憶や認知機能に障害が起きる。症状の進行を抑える薬が実用化されているが、ワクチンなど根本的な治療薬は研究段階にある。運動や音楽、アロマセラピーを用いた非薬物療法も取り入れられている。